



なぎさは海のゆりかご

海のゆりかご通信 No.26 Nov.2011

～ 藻場・干潟・サンゴ礁・ヨシ帯・浅場… 「なぎさ」は人と海との共生の場 ～

「なぎさシリーズ」

今回の旅は、三重県伊勢市の「今一色（いまいっしき）」。お伊勢さんの名で古くから親しまれるこの地の浅海（あさうみ）で、生き物や海と対話してきた海苔漁師の太田さんにお話を伺いました。



なぎさシリーズ No.22

お伊勢さんの浅海（あさうみ） その恵みを後生につなぎたい 太田 忠

伊勢市二見町「今一色」

伊勢市は、全国の誰でもが知っている町。日本人の総氏神といわれる「天照大御神（あまてらすおおみかみ）」がお祀りしてある伊勢神宮には今でも数多くの人々が訪れている。

その伊勢市の海側にある二見町は、清きなぎさと称される二見浦を有し、伊勢神宮に参拝する前の沐浴の場として古くから多くの人々に利用されてきた。また、この清きなぎさを利用した塩づくりも古くから盛んで、今もなお、神宮に塩を納めるための施設「御塩殿神社」では、五十鈴川の河口の水を利用した塩づくりが行われている。

この五十鈴川河口に面するのが、今回紹介する「今一色」である。

今一色は、漁業の町。この地に暮らす私も漁師であり、現在、海苔やクルマエビを獲って、暮らしている。

今一色の漁業

私が生まれ育った今一色は、漁業の町である。私の親父も漁師である。親父が営んでいた漁は、春から夏にかけてのクルマエビ漁と秋から冬にかけての海苔養殖。私が小学校や中学校の時（30～40年前）は、まだ海苔は天日干ししていた時代であり、良く海苔すき作業を手伝わされていた。

この時代の今一色の漁業は、海苔漁業が中心で、全国的にも”今一色の海苔”は「照り」と「香り」が良く、特に「焼き色」は抜群で「今一色の海苔は化ける」と評判であった。当時は海も綺麗で、今は誰も泳ぐことがなくなった五十鈴川河口にある船だまりで、ウグ

	都道府県:	三重県
	地域協議会:	三重県環境・生態系保全活動支援協議会
	活動組織名:	今一色干潟保全会
	協定先:	三重県伊勢市
	構成員数:	77名
	対象資源:	干潟・浅場
活動内容:	計画づくり、モニタリング、耕うん、稚貝等の沈着促進、保護区域の設定、浮遊・堆積物の除去など	



インタビューに気さくに答えてくれた太田さん

イの姿などを見ながら良く泳いだものである。

私が漁業を始めたのは平成元年、28歳になってからだ。それまでは、伊勢市内で会社勤めをしていた。漁師になったきっかけは、自分の稼ぎより漁師である親父の収入がびっくりするぐらい良かったからである。実に単純な理由である。

私も親父と同じで主にクルマエビ漁や海苔養殖を行っている。現在、今一色で行われている漁業は、カレイ・コチ・ガザミ・クルマエビを対象とした刺網漁、アサリを対象とした採貝漁、そして海苔養殖が主であり、親父が漁をやっていた頃と、ほぼ同じである。ただ昔と今とで違うのは、海苔養殖に関しては、最盛期に200軒ほどあった漁家が今は20軒まで減少してしまったこと。その反面、アサリ漁を行う漁家が増加したことである。

海苔養殖の漁家が減少し、反面アサリの漁師が増えた理由は、海苔漁が重労働のために、高齢となった漁師さんが後継者がいないまま漁をやめ、アサリ漁に移ったためである。



今一色の浅海（あさうみ）

今一色の漁場は、全国でも一番になるほどの清流”宮川”と、川上に天照大御神が鎮座する”五十鈴川”、そして県内の中で水質の悪化が深刻視されている”勢田川”の3つの河川が合流する河口域とその前面に広がる海である。漁場となる水深は、深くても10m程度で、限られた範囲にある干潟を含む浅海（あさうみ）が、今一色の漁業にとって重要な場所となっている。

狭い漁場ではあるが、昔は、海底が良質な砂泥でおおわれており、伊勢湾の魚介類の貴重な産卵場になっていた。そのため、たくさんの魚介類が集まっていた。また、今一色か



ら二見浦にかけて広がる砂浜には、ウミガメがやってきて良く卵を産んでいた。

この狭いながらも豊かな浅海の恵みが、私らを育ててくれたわけであるが、今から15年ぐらい前から状況が一変してきた。浅海的环境が悪化してきたのである。

先にも話したように、今一色の浅海は、3本の川が集まった場所にあり、その影響を良くも悪くも強く受ける場所にある。特に、現在、海苔養殖と並んで貴重な漁業資源となっているアサリの生息場である干潟への影響は、非常に大きい。

昔は、そうでもなかったが、現在、大雨が降ると大量の水が一気に河口に流れ込んでくる。そのため、干潟の砂泥が非常に良く動く。また、大量の水とともに粒子の細かい泥やへ

ドロが大量に流れ込んできて干潟に堆積する。更に、この時に、河口域の塩分濃度が当然下がるわけだが、この低塩分の水が干潟域にとどまっている期間が長い間続くようになった。

このように、厳しい環境下にさらされると、当然、そこにいる干潟の生き物は弱って、最後には死んで、生き物がなくなってしまふ。こうした事態が、現在、今一色の浅海でおきており、われわれ漁師も困っている。

浅海をまもる取り組みをスタート

今一色で獲れるアサリの漁獲量は、平成のはじめ頃は900トン近くあった。しかし、平成15年頃には、先に話した干潟環境の悪化によって、その漁獲量は100トンをきるまで



になった。

何か対策を練らなきゃと頭を悩ませていたちょうどその年に、全国の海苔養殖などの浅海漁業者が集まる研修会で、熊本県の松尾地区の干潟再生の話聞いた。松尾地区では、われわれの干潟と同じように、底質の悪化などの原因でアサリなど干潟の生き物がいなくなった状態が続いており、その対策の一つとして行われた海苔網を用いたアサリ資源の回復活動が効果をあげていた。

この取り組みならば、海苔養殖の盛んな今一色でもやれると、その年から、海苔網を用いた活動を展開するようになった。

やり方は、干潟にはアサリの稚貝が集まる場所があるのだが、そこに海苔の支柱柵を立て、使い古しの海苔網を海底すれすれに張っ



てあげる。その後は、柵や網の状況を定期的に見回り、網交換等を行うだけである。このように網を張ることによって、砂の移動を防ぎ、網の下に着底した稚貝が環境の悪い場所に散ることなく、その場所に安定的にとどまり成長できるというわけである。

この方法は、稚貝の発生は認められるが、その貝がなかなか成長できない今一色の干潟には、最も適したやり方だと思っている。

この活動を始めてかれこれ10年近くになるが、今では、大小様々のアサリがたくさん確認できるようになっている。また、今年の東北地方太平洋沖地震の時も、今一色の大部分の干潟は津波によって砂が大きく移動し削られたが、この海苔網を張った場所だけは、砂の移動がほとんど認められず、貝やその他の生き物も生き延びることができた。

今年は津波による海苔養殖の大打撃、秋の台風による浅海の打撃と、暗い話題が付きないう年であった。しかし、この海苔網の場所の生き物の状況だけは明るい話題に尽きず、浜のみんなで喜んでいる。



これからの今一色の取り組み

現在、浅海をまもる取り組みは、平成 21 年度からスタートした環境・生態系保全対策事業によって更に活発化している。まず「今一色干潟保全会」を結成し、漁協の組合員総出で取り組みにあたることにした。活動は、海苔網を用いた取り組みだけでなく、ヘドロの堆積で全く生き物がなくなった浅海での耕うんや保護区域の設置などの取り組みも行うことにした。耕うん活動の効果は、まだ初めて3年しか経過していないので、あまりみえてないが、底質の状況などをみると、生き物が住めそうな環境に少しずつ変化してきていると思う。また、こうした活動を通して、漁師の意識も変化してきている。みんなが、アサリの資源や浅海的环境について考えるようになってきたことは、大きな収穫である。

私も今年で 51 歳。まだ、海苔漁をメインに漁業を営んでいるが、あと 10 年もすると、この干潟を利用したアサリ漁が生きていく糧となる。そのためにも、この干潟や浅海的环境や生態系を少しでも良くなる方向にしてい

また、わずか3名ではあるが、30代と20代の若手の漁師が、現在今一色で海苔養殖をメインに漁を行っている。この次世代の今一色の漁業を支える仲間に、豊かな干潟や浅海を引き継ぐことも大事なことである。稼げる漁場を残してあげれば、その仲間ももっと増えるだろう。

今一色の浅海は、海だけの問題ではなく、自分たちだけでは解決できない山や川の問題に直面している。台風で大水がくると、再生活動が一からやり直しになることもある。だけど、めげずに、豊かな浅海を取り戻すために、これからも楽しみながらみんなで活動をやっていききたいと思う。

(取材・文◎吉永 聡[本誌編集部])



～ 編集後記 ～

今一色の五十鈴川河口にある漁港から1 kmほど上流に歩いたところに、御塩浜(みしおはま)と呼ばれる塩田がある。この塩田では、伊勢神宮にお供えされる塩の素となるかん水(濃い塩水)が作られている。鳥居の前に広がる塩田は、なんだか空気が凜としている。ここで神聖な塩、有り難い塩が生まれるのだと、容易に想像させてくれる雰囲気はここには存在している。ちなみに、ここで作られるかん水は、五十鈴川河口の淡水と海水が混じった”甘い水”が素になっている。普通よりきめ細やかな塩ができるのだそう。ここで煩惱の塊である私はふっと思う「こうした有り難い水が流れ込む今一色のアサリなどの魚介類はきっと有り難いモノに違いない。今一色には『伊勢手掘りあさり』と呼ばれる春(旬)限定のアサリがある。食べてみたい」と…(吉)



もりびと “なぎさ”の守人シンポジウム

海と魚と食を考える講演や“なぎさ”(藻場・干潟など)の保全に取り組み、その働きを復活させようとガンバル漁師・市民・行政…そんな“なぎさの守人”たちの活動を紹介します。

2011. in
12/10 大阪

2012. in
01/14 東京

詳しくは [ひとつみ.jp](http://hitoumi.jp)
(<http://hitoumi.jp>)

JF全漁連 漁政部
環境・生態系チーム
TEL 03-3294-9616
E-Mail info@hitoumi.jp

